
雑記の綴り

ヨリシオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑記の綴り

【Nコード】

N8533J

【作者名】

ヨリシオン

【あらすじ】

この小説は連載と表示されていますが、短編の総集編となっておりますのでご了承ください。一話あるいは数話を1つの物語としております。一次創作・二次創作も混在する予定です。また、小説に限らず、小説のネタまとめ、戯曲もときなども混ざるなど、1つの作品枠をとるのに自信が無いものがここに並べられますので、閲覧の際はご注意ください。（尚、二次創作の場合は、原作名を前書きに明記致します）

はじめに

こちらは連載と表示されていますが、短編の総集編となっております。

一話あるいは数話を1つの物語として展開されています。一次創作や二次創作、ジャンルなどもすべてが混在ですので、ご了承ください。閲覧下さい。

一次創作か二次創作か、ジャンルといった情報は、前書きに全て記載いたします。

（二次創作の場合は原作名を表記）

また、全く独立したものを連続で並べる性質から、感想のみを受けつけています。

評価はできませんのでご了承ください。

バレンタインのニドリーナ（前書き）

原作：ポケットモンスター

ジャンル：恋愛なのか文学なのか

2月14日はバレンタインデー

バレンタインのニドリーナ

「リーノ、いる？」

太陽が昇りつめる爽やかな青空を背景に、一匹のニドリーナの声が岩場の大地に響き渡った。遠くのほうで一匹だけ確認できるポケモンに目を凝らすと、目の前の巨大な岩を睨みつける鋭い目をしたニドリーノの姿があった。ニドリーナの声聞き取ったニドリーノは、自分の名前が呼ばれたことに気がついて、その大きな脚に力を込め、突進する体にブレーキをかけた。

「その声、リーナか」

荒々しく息を切らしながら、声のする方を振り向くリーノ。柔らかな眼差しで見つめるリーナと目が合うと、リーナはパッと視線を逸らしていた。

俺はいつものお節介なリーナが来た、とため息を漏らしていた。バトルで強くなるために無心でトレーニングに励めるよう、俺は誰も訪れないような荒れた岩場をわざと選んでいる。去年ぐらいに、あまりにも無心に訓練をしていた俺は、いつの間にか4日も飲まず食わずになってしまい、ここで倒れてしまったことがある。それから数日経ったとき、奇跡的に通りがかった奴に救助されることになる。ボロボロな俺を助けてくれたのが、今日の前まで駆け寄ってきたリーナであった。俺の1つ下の年齢らしい。

「そんなに、ぶっきらぼうな顔しないでよ。ほら、差し入れ持ってきたの」

リーナは口をへの字にしている俺をよそに、背中の中ゲに結び付けてある風呂敷をほどいて地面の上に敷き、水筒と弁当を俺の前に並べた。最初の頃は要らないときっぱり断っていたのだが、彼女の強引な差し入れは日を過ぎても変わることなく続けられた。トレーニングの邪魔になるので、さっさと並べられたものを頂いた方が早い

と分かり、今はこうやって一緒に食事をしている。

「どう、美味しいかな？ 前回のリクエストに応えて、今回は多めに作ったんだよ」

「ああ、うまいな」

俺は、今日も変わらない気の利かない一言感想を述べ、黙々と食べていた。いくらあの時にここでぶっ倒れていたからって、ここまで心配する必要もないんだが。4日間何も食ってなかったことを伝えようと、「じゃあ、3日くらいに1度顔を出すね」。俺はそこまでガキじゃないんだけどな。初めて疑問を持ってから、もう半年が経過しようとしているのか……。

「リーノ、まだ寒いんだから、無茶すぎて風邪ひかないようにね」不意にリーノの声が耳を貫き、俺は視界を目の前に戻した。

気づけば目の前の料理は無くなっていた。食い足りないと思いつつ、普段から要らないと言ってきたので、おかわりを言うわけにはいかなかった。

「ああ、わかった」

今日は2月13日。確かに凍えるような寒さが訪れてから、随分と日にちが経過している。が、普段から鍛えているから、そこまで問題はないだろう。リーノは適当に相槌を打つと、十分に休めた体を奮い立たせ、先ほどの集中を取り戻すべく、訓練場へと急いで戻っていた。

「ちよつと、食事の後にそんな激しく動いたら……！」

リーノが気を遣って遠ざかる姿に目をやると、巨大な岩の前でわき腹を押さえているリーノの姿があった。

40分ほど歩き、カラの弁当箱と水筒が包まれた風呂敷を持ったりリーノは、自分の住処へと戻ってきていた。

「明日、どんな顔をして渡せば良いのかしら」

地面をも貫きそうな重たいため息をつきながら、リーナはテーブルに置かれた1つの箱を、ぼんやりと眺めていた。一辺が10センチメートルほどの、茶色い立方体の箱だ。そんな箱の隣には、薄紫色の小さな花が一輪入れられた花瓶が置かれていた。明日は、今も訓練に励む彼に、この箱に小さな花を添えて差し入れしようと考えていたのだ。渡す練習のつもりで、何度も差し入れの練習を頭の中に思い描くのだが、自分の表情と最初の言葉がなかなか思いつかなかった。うーん、あーあ、もう、様々なうなり声を何度も何度も部屋に響かせ、懸命に差し入れのシーンを想像していた。

リーナがここまで苦戦するのは、緊張しているほかにも大きな理由がひとつあった。

それはリーノの口数の少なさにある。リーノは嬉しいことや楽しいこと、悲しいことや辛いことがあっても、何一つ顔色を変えず、ほんのわずかな言葉しか言わない性格をしている。弱音を簡単に吐くことが無いので頼りがいがあるが、彼のために何か企てようと思うと、途端にその口数の少なさが邪魔になる。それを責めるつもりは微塵も無いのだけれど、次から次へとしかかる不安に耐えていけるかが心配であった。

「そういえば、あの時もリーノは笑ってくれなかったな」

12月24日の夜、リーナはいつもどおり差し入れを持って、リーノが居る岩場に到着した。しばらくは岩場付近で寝泊りすると言っていたので、ここに来れば会えると思っていたからだ。いつも通りの鋭い目と武骨な声で、彼は私を出迎えてくれた。

「クリスマスイブだから、特別に2回目の差し入れだよ」

「要らねえよ」

「別に、疲れてるなら無理に手で受け取らなくてもいいよ。ここに置いておくから」

「腐るだろ」

「大丈夫、焼いてある物だから、明日でも十分だよ」

「んな厄介なモン、持ってくんなよ……」

月明かりは、間違いなく彼の顔をくつきりと映し出してくれている。ふと気づくと、私は月明かりから目を逸らしていた。どんどんと陰しくなる彼のとがった視線が、私の胸にグサリと突き刺さる。本当にお節介なだけだったのだろうか。普段から黙々と食べてくれているのは、本当に仕方なく付き合ってくれているだけだったのだろうか。今の言葉を最後に、夜の0時を迎えた。

気づけば、時計の表示が0時を示していた。カレンダーの日付が2月14日に変わっている。現実に戻った私は、横になっている体を起こして、もう一度だけテーブルの上においている箱をぼんやりと見つめた。

「そんな中でも、結局ここまで準備しちゃった私。やっぱり本気なんだなあ……」

本番を寝過ごすわけにはいかない。昨日と同じ時間に支度が済むように、早起きしなくちゃね。

リーナは、今日も変わらぬ月明かりに照らされながら、ゆっくりと目を閉じた。

次の日の朝、期待通りの快晴が一面に広がっていた。ポツポツが奏でる独特な鳥のさえずりに、ゆっくりと目を開けるリーナ。数秒まどろんだ後、弾かれたように飛び起きた。

「そうだ、準備しなきゃ！」

これといって寝坊をしたわけではなく、むしろ早く目が覚めている。ゆっくりと背伸びをすると、水溜りに向かい、きれいに体を洗い、いつも以上に清潔にする。爪も滑らかになるように、キメの細かい石で研ぐ。ほのかな香りを漂わせるために、風呂敷に香水を少しだ

け。花瓶に刺している花を手に取り、そつと箱の中にしのばせようとしたとき、あることに気がついた。

「そついえば、今から出発するとリーノの特訓中に渡すことになっちゃうね」

1つのことに集中するタイプが何かに取り組んでいるときは、よほどのことが無い限り声をかけないようにする。精神を高めて向き合っているところに水を差された挙句、それが大した用事でもないに分かると、再び集中するためにはかなりのパワーを消費する。誰かと交流することが好きな性格なら、水を差されたとは思わないからあまり苦にはならない。けど、リーノの性格はこれには当てはまらないことを私は感じていた。一人で黙々と取り組む彼は、大した用事でもない差し入れなんかで邪魔をされると、本当にただ水を差されただけだと思ってしまうこともある。人がよければ、その場で怒りを表さずに我慢して付き合ってくれることもあるだろうけれど、もし、私のことよりも大幅に特訓の方が大事だったとしたら……。

この先は、あんまり考えたくない。

「あせつちゃダメよ、私。いつもどおりのペースで。リーノが休憩を入れるお昼ごろに、ぴつたり到着するようにしよう」

支度を終えたリーノは普段より、1時間早い11時30分に出発したのであった。

心臓の音がうるさく響く中、リーノは彼の居るであろう静かな岩場にたどり着いた。草一本生えていない大地が目の前で広大に開かれていた。誰も訪れるような場所ではないため、今日も誰も居ない。リーノが特訓をしていれば岩を砕く音が響いていたりするので、静かな大地も祭りをしているかのように賑やかなのが、普段の印象である。

しかし、今日は異様な静けさが辺りを支配していた。風も吹いてい

ない。それが逆に焦りを覚えてしまう。

「あちゃあ、リーノは休憩中かな。まあ、特訓を再開したらうるさくなるよね」

右を見ても左を見ても岩、岩、岩。無闇に探し回ると自分が迷子になりそうなので、おとなしく待っていることにした。音が響けば、それを辿ればいい。荷物を降ろして、リーナは雲が無い空を仰いでいた。

何分経過しただろう。こんなに長い休憩は今までにとったことがない。

私が差し入れを持ってきても、彼は食事を済ませるとすぐに特訓を再開するくらい休憩が短い。今までで一番長くても、彼が腰を下ろしている時間はせいぜい15分か20分。せつかちなのか、私と一緒に居るのが気まずいのか、休憩はそんなにとらない印象があった。太陽の傾きを感じてしまうくらい間隔を空けてしまうなんて、身の覚えの無い空白だった。

「私が居ないときに、思いつき羽を伸ばしてるんだろうな」

普段から私を厄介者扱いしている彼だ。こういう虚しくなるような可能性も、あるのかもしれない。私はひたすら待つてみることにした。今日はこの箱を渡すために、様々な用事をキャンセルしてきたんだから。

きつと聞こえてくるはずの音を聞き逃さないようにするため、私は目を閉じその場にしゃがみこんで待つことにした。

しかし、私の耳を揺さぶるものはやってこなかった。

何も無いこの時間が、逆に私には様々な黒い影が見えるような気分になる。

不安、焦り、恐怖、緊張。色んな感情があるだろうけれど、私には、それらが何者かの黒い影に飲み込まれそうな、そんな光景に見えてきてしまう。

考えてもみなかったけれど、もしかすると今日は特訓をしていないのかもしれない。それなら、2時間も3時間も音がしないことに納得できる。たまたま、偶然にしていないのか。それとも、今日という日を意識して……？

太陽は夕日となって、山に隠れようとしている。もう、待つだけ無駄なのだろうか？

「そっか、今日はここに着てないんだね、リーノ」

私は、夕日に照らされた赤い道をゆっくりと歩き出した。彼の姿を探している、というと、何だかしっくりこない。どちらかといえば、私にここまで興味が無かったんだっていう事実を納得するための理由を探している。

気の済むまで探しても彼が居なければ、私は思い上がりで行動していたという証拠にもなる。きつと、納得できるはず。

「それとも、特訓しか頭に無いリーノなら、今日が何の日かを知らない可能性だってあるよね」

岩の壁に投げつけた私の声は、反響となって私の耳に返ってくる。私はその音を受け取ることなく、走り抜けてリーノの姿を探し回った。

夕日はあっけなく沈み、辺りには暗闇がやってきていた。わずかな月明かりが、辺りをぼんやり映し出していた。

未だに彼の姿が見つからない。とうとう、私は歩くのをやめてしまった。背後からついてきていた黒い影は、いとも簡単に私の精神を飲み込んでいく。もがく気にもなれなかった。

「誰も居ないし、ここで少し休憩しよう」

近くの平らな岩にもたれかかると、私はグラグラと歪む視界のまま、月が照らす目の前の巨大な岩を眺めていた。

本当なら、彼が訓練で使うような、頑丈な岩である。

——「野生のポケモン同士のバトルなら、こんな岩より硬いヤツはうじゃうじゃ居るからな」

鋭い眼光で言うリーノの姿を思い出す。何を見つめて言っていたのだろう。

——「バトル中に、こんなケガで痛い痛いって騒いでるワケにもいかねえだろ？」

目では明らかに痛いことを訴えているのに、私の前で堂々と立っていることもあったっけ。

——「この岩くらいは壊せるくらい強くなりたいな」

目標に対して一直線というのは、今時珍しい。頑張っている姿が、私には輝いて見えた。いくら強そうに見える彼でも、体は私と同じ。力が強いとはいえケガをすれば痛いし、いくら無口とはいえ言葉の刃を突きつけられて平気とは想像しがたい。

——「また、差し入れか？ お前、本当にお節介だな」

嫌な顔をされたら、私だって沈んでしまふ。それでも会いたいと思う自分がいる。それに気づいたのは何時ごろからだっただろう。そのときから、私は彼に気があったのかもしれない。

「ただ単に、無茶すぎるリーノが心配になっただけ。それだけかもしれないんだけどね」

もう、探すだけ探した。あまり夜遅くなると、凶暴な野生ポケモンに帰り道を襲われるかもしれない。早く帰ろう。そばに置いてあった荷物を拾い上げると、私は帰り道を探すため、涙をふき取った。

「さて、ここからが問題よね」

迷子を覚悟で来たとはいえ、実際に迷ってみると他人事では済まないのが現実である。無尽蔵に広がる闇の岩場に、私は歩くべき方向を見失っていた。「多分こっち……」など、消え入りそうな声で右往左往に移動を繰り返す。予想通り、全然岩場から脱出できない。むしろ、先ほどより大きな岩が密集する場所に踏み込んでしまった

らしく、それぞれの岩の高さが4・5メートルに達していた。ちょっとした崖である。月の光はしっかりと差し込んでいるのに、見渡しても岩しか確認できなかった。

「もう、方向音痴ってこういうときに不便よね」

いたずらっぽく笑ってみた。誰も居ないところに笑いかけた私は、そこから黒い影がにっこり笑い返してくれたような気分になり、ぞつと身震いした。すぐに反対を向いて歩き出していった。

先ほどから大きな岩しか見ていない。私は探しに来たことを少し後悔していた。太陽がまだ上にあつたとき、すぐに彼を探しに行けばよかった。そうすれば、今でも十分に明るいはずだ。もしかすると、リーノが見つけてくれていたかもしれない。リーノじゃなくても、誰かが。そう思ったとき、私はここが不毛の大地であることを思い出す。それに併せて、リーノが4日も絶食をしていたことも記憶に蘇ってきた。

「わ、私……。きつと動揺してるのよ！ 普段なら、こんな悪いことばかり想像しないのに」

足元が不注意になっていた私は、足元にあつた小さな石があつたことに気がつかず、そのまま踏んでしまい、転倒してしまった。もういいや、この痛みに紛れて、このまま泣いてしまおう。倒れこんだリーナは、そのまま立ち上がることもなく、そのまま目を閉じてしまった。こんな大岩に囲まれた状態で、動き回るだけ迷うだけ。もう十分に道を見失っているわけだが、これ以上は迷いたくない。

しばらくじつとしていると、段々と気温が下がってきた。夕方まではそこまで気にならなかったが、今日は2月14日。寒さが堪える季節である。私は、冷えた頭を抱え、そつと体を起こした。

今一度、辺りを見回してみる。乾いた目で確認した私は、先ほどか

ら目の前で起こっていた静かな異変に、やっと気づいたのだった。

「…そうよ。小石を踏んだのよ。どうして、こんな所に小石が……」
前を見ても後ろを見ても大きな岩しかないのに。右も左も。ふと左を見たときだ。粉々に砕かれた大岩の残骸が、山のように積もっていた。足元にあった小石は、左のほうにある小石の山の1つだったのだろう。ここまで転がってきたのだろうか。

「こんな道端に落ちてたら、危ないじゃない」

人通りが少ないとか、関係ない。こんなことでも気を紛らせられるのなら。私は元の場所に戻そうと立ち上がり

、小石を拾い上げた。

石の山のそばまで近寄ると、私は手に持っていた小石をそつと地面に。山の一部となった小石を眺めながら、私は大きなため息をついた。

「私も、この小石みたいに元の場所に帰られるのかな」

一度置いた小石をじっくりと見つめる。手にとって運んだように、誰か私を出口まで案内してくれないだろうか、とリーナは適当につぶやいていた。

「こんな場所に来てくれるのって、リーノぐらいしか……」

そうだ。誰も来ないっていうことは、昼に来た私も感じたことだ。

私は、誰も居ない大空に向かって、口を大きく開いた。

「リーノおー！！！」

喉が痛くなり、ゴボゴボと咳き込んだ。そういえば、緊張していた私は朝食も済ませていない。喉がカラカラなことに初めて気がついた。お腹が空いていることにも気づいてしまい、そのままうなだれてしまった。

「リーノ……」

かすれた声で小さく呟きながら、私は静かに目を閉じた。

「リーナの声？ … いや、そんなはず、ないよな。気のせい、か」
低い轟くような音が、空気を伝って私の耳に飛び込んできた。ハツとして、私は目をパチツと開ける。聞こえてきた言葉をもう一度頭の中で繰り返した。そして、聞こえた方——小石の山の中——に向かつて、私は返事を送った。

「リーノっ！？ そこに居るの？」

確かめたい気持ち自分が自分を急かす。なかなか帰ってこない返事に、私はムズムズしていた。

「リーナ、か。今日も、きてくれた、んだな。あり、がと……」
遅れて帰ってきた言葉は間違いなくリーノの声だ。しかし、歯切れの悪い彼の声は、今にも闇に飲み込まれてしまうかのような小さなものであった。私は聞こえてくる小石の山を見て、彼の身に危険が迫っていることにやっと気がついた。

いつからなのかは分からない。どうしてなのかも分からない。でも、リーノはこの石の山に埋もれてしまっている！ 助けなきゃ！
私は、彼を勇気付けるため、小石をどかしながら必死に叫んでいた。
「何そんなに頼りない声出してるのよ？ 頑張って助けるから、もうちょっと元気な声出してよね？」

見られたくない涙なんて、今は関係無かった。無数にある石を持ち上げ、横に動かし、地面に捨てる。先ほどと何が変わったのか分からない石の山から、また1つ。減ったかも分からない石の山からまた1つ。私は、フラフラしながらも急いで石をどけていった。

「無茶苦茶、言うなよ、な。こんな時まで、お節介、なんだからよ……」

「別にいいでしょう？ 私がどれだけ不安になってるか分かりやすくて」

少しだけ手を止めて、横に目を移す。半分くらいだ。ずいぶんと移動させているのだけれど、一向に彼の姿が見えてこない。

「不安、か……」

「えっ？」

「すまない、な。俺が、頼りねえ、ばつかりに。もつと強かったら、お前に、こんなに心配、かけること、なかったのに……」

さつきよりも小さくなっていくリーノ声を耳にしたとき、私の中で何かに火がついた。疲れていたはずなのに、想像以上の大きさで、私は声を張り上げる。

「じゃあ、もつと強くなってみなさいよ！」

自分でもビックリしたため、一呼吸置いてから、また声を張り上げた。

「こんなところで弱気にならないでよ！ 私はここで終わりにするつもりなんて無いの。これからなんだから！」

一通り叫んだ私は、また1つ、石を取り除いた。

次の石を運ぼうと無心になって目の前のものを拾い上げた。触った感触が今までのものとは違っていて、ふと我に返った。目の前の物は石ではなかった。しかし、その正体に気がついたリーナは思わずその手を離してしまい、もう一度拾い上げて横にずらした。

「リーノ、いったいどんな大怪我をしたのか分からないけれど、頑張っ……て！」

はやる気持ちを抑え、リーナは腕に力を込めて石をどかした。

「別に、騒ぐほどの怪我、してねえよ。大声、出すな」

リーノが強がっているのはすぐに分かった。

「さつきね、あなたの頭に生えているツノを拾ったのよ」

「……そう、か」

再び石を1つどけると、私は目指していたものを発見した。リーノの頭である。私は急いで彼の頭に乗っかる石をどけていった。ツノが完全に欠けてしまっているが、間違いなくリーノの顔だ。うつす

らと目を開いたリーノは、顔をリーノ方に向けると、一言ボソリと呟いた。

「どけよ」

「ん？」

「そこから離れろ」

私は言われるままに石の山から5・6歩離れた。改めて見ると、石の山はずいぶん減っていて、その高さは1メートル弱くらいになっていた。彼の身長は1メートルくらいだったので、大体の石が取り除けたことになる。

しばらく見守っていると、グググと石の山が持ち上がるのが分かった。バランスを崩した小石がバラバラと崩れていく。

「うおおっ！！」

大きな雄たけびと共に、リーノは石の山から這いずり出てきた。彼の上に乗っていた大量の石は、左右にゴロゴロと落ちていく。彼は不安定な足取りをしながらも、広がる大地に堂々と立っていた。

「リーノ！」

私はすぐに駆けつける。心配していたこともあったし、辺りが真っ暗でさびしかったこともあった。暗闇だけが広がる中、リーノだけが明かりのように見えていた。

しかし、目の前まで駆け寄ったとき、リーノの体は地面へと崩れ落ちた。ドンという音と共に、私は胸が締め付けられたような衝撃が走った。

「リーノ、しっかりしてよ！」

リーノの体は予想以上に傷だらけであった。頑丈なはずの皮膚が至る所でデコボコしており、そこには出血の跡があった。幸いにも、今はほとんどの場所のキズが塞がっているが、出血の跡は合計で10をゆうに超えており、安心できる状態ではない。自分でも、無理な注文をしているのは承知の上であった。

「うるせえよ……。もう、心配する、必要も、ねえ、だろ？」

あくまでも平気な素振りを見せる彼。私は、適当なサイズの傷跡を探すと、そのケガをポンポンと叩いてみた。

「ぐっ……！？」

「この状態で心配するなって言うほうが無茶なのよ」

おとなしくなつた彼を見やりながら、私はゆっくりと言葉を継ぎ足した。

「ここは何も無い岩場。他の野生ポケモンの姿も無いよ。無理しなくてもいい。大丈夫だから、ね？」

閉じていた彼の口が、ゆっくりと動きをみせた。

「分かったよ」

リーナとリーノは、お互いがそばに居ることを確認しあうと、少しの間静かな時を過ごした。リーナが周りを見回していると、例の黒い影が、目の前に。思わずびくつと体を震わせると、急いでその正体をさぐり始めた。

怖い、不安だ。そこまではすぐに分かった。でも、それが一体何に對しての不安なのか。それを考えたとき、目を閉じているリーノの姿が映った。このまま永遠にリーノの目が覚めなかったら。そんなことが一瞬頭の中によぎる。私は飛び起きた。

「…どうした？」

そばで地面に倒れているリーノからの声だ。彼はまだ眠っていないかった。

「うつん、何でもない」

何でも無いはずが無い。自分の答えに、自分で突っ込みを入れた。何か不安を取り除く方法は無いだろうか。

「今日は、お前が来ないと思ってたんだ」

そばに居るリーノが、珍しく私に話しかけてきた。出かけていた言葉をゴクツと飲み込んで「そうなの？」と相槌をうった。

「いつも3日おきに来てくれるだろ？ 昨日来てくれたばかりだからさ。わざわざこんなところまで毎日来ることもない。そう考えて

「ただ」

リーノは視線を脇目に逸らすと、地を這うような低い声をそつと響かせた。

「俺に何か用でもあったか？」

リーノは、私があることが予想外だったみたいで、首をかしげながら私のほうを振り向いた。突然だったため、彼とバツチリ目が合っってしまう。思わず視線を逸らした。

「あ、うん。確かに用事はあったんだけどね」

大怪我をしている相手に対して、のんきに差し入れをする気になれるわけもなく。私は首を横に振った。

「すまねえな。こんなケガしてなかったら、何でも聞いてやれるんだがな」

「いいの。リーノの体のほうが大事だから。ゆっくり休んでね」

やっと一息つける。そう思って肩を撫で下ろしたリーノであったが、片付いていない小さな問題が今になって浮上してきていた。

「さ、寒……」

草一本生えないこの場所では、暖を取れるようなものは存在しない。温かいと思えるようなものは1つぐらいしかなかった。

「リーノ、今日も冷えるね。そばに寄ってもいい？」

「……ああ、構わねえけど」

リーノは一度言葉に詰まらせながら、続きのセリフを口にした。

「言う前からくつつくんじゃねえ。ビックリするだろ？」

「あれっ？」

そばに寄ろうとした私だったけれど、落ち着いてみたら、既に私はピツタリと擦り寄っていた。一体いつからだったのかしら……。怪我人の体をグイグイと押してしまっていたようだ。申し訳なくなつた私は、少しだけ彼から離れた。

「べ、別に離れる必要もねえだろ？」

俺も寒いんだから。彼はそう言葉を付け足す。私は、月明かりに照らされた体の大きな彼に寄り添った。彼の温かな体温が直に伝わってくる。

「リーノ、熱でもあるんじゃない？ ちょっと熱いよ？」

「だ、黙ってる……！」

まあ、体格の良い彼だから、代謝も高いんだろう。私は疲れきった頭でそう考えながら、ゆっくりと目を閉じていった。心地よい温もりが、じんわりと私を眠りの世界へと誘う。今日は結局のところ、彼にプレゼントを渡すことはできなかったけれど、これはこれでいいのかな。そう考えながら、私は深い眠りについていった。

次の朝、目が覚めたリーノは、自分の家でないことに驚きながら体を起こした。もっと驚いたのは、こんな近くにリーノが居たことである。

「朝は大声出しちゃってごめんね、リーノ」

「……ったく、これが命の恩人かよ」

相変わらずのぶつきらばうな返答。この調子なら、きっと元気な姿に戻ってくれるだろう。昨日のような弱気な姿は感じられない。普段の見晴らしのよい岩場まで戻ってきたリーノとリーノは、それぞれの無事をたえ合うかのような笑顔を交わしていた。

「せっかく無事に帰ってこれたんだから、もう少しぐらい喜んでもいいのに」

「これでも感謝してるんだぜ？」

もつとも、彼は口元も目も笑っている気配がしない。ただ、口数が少し多い気がする。

今なら、渡せそうだ。

「早く元気になって欲しいから、これ……あげるわ」

背中に巻いていた風呂敷を広げ、中にあった箱入りの袋を差し出し

た。

「差し入れか？」

きよんとするリーノ。まあ、それも納得のいく反応だった。一晩明かした代物だから、普段の持つてきているような食材では腐ってしまう。本気で差し入れだと思っっているのなら、疑問に思うのも無理はなかった。

「偶然にね、今持つてるのは日持ちするものばかりだから。安心して食べていいよ」

不思議そうに眺めながら、リーノは袋を受け取っていた。差し入れでないことはすぐに気づいただろう。

かといって、中身について答えるわけにはいかない。いや、別に変なものを入れたつもりも無いけれど。これ以上質問されると答えにくいということに、たった今気がついた。

「あ、そうだ！ 今日友達と会う約束してたんだっけ。急いで帰らなくっちゃ！」

「あ、おい、待てよ。これ、何だ……」

「ごめん、リーノ！ それ、帰ってからでもいいから、ゆっくり食べてね。じゃ、またね」

「お、おう。またな、リーノ……」

慌てて帰っていったリーノを呆然と見守っていたリーノは、受け取った袋の中身を覗いてみることにした。

「明らかにいつもと違うぞ、これ」

体のケガがまだ少し痛む中、俺はゆっくりと袋の中に入っていた箱を取り出した。

ほのかな香りが一面に広がる。箱に添えられていた何かを落としてしまった。

「おっと、いけね……」

拾い上げようとしたそれは小さな花だった。すこし干からびてしまっているのは、昨日の間に渡すことを想定していたからだろ。薄紫色の小さな花。

「なんだこれ？　かわいい花だな」

よく見てみるも、名前は見当もつかなかった。強いてあげるなら、俺と同じ紫色の系統ということぐらい。色の濃さの関係で、それはリーナのような雰囲気を漂わせていた。昨日の夜、自分よりも先に寝てしまったリーナ。そんな彼女の姿を思い出していた。

「そうそう、この中身を確かめないと……」

いつの間にか火照^{ほて}ってしまった頭を左右に振りながら、リーナは箱のフタをそつと開けてみた。すると、小さな茶色い粒——1辺が4センチメートル程度の正方形——のものが12個ほど確認できた。それに続いて、甘い香りが飛び込んできた。

「あ、昨日つてもしかして……」

一応、俺も2月14日が何の日かぐらいは知っている。バレンタインデー。由来とか難しいことは忘れてしまったが、今では女の子が男の子に告白をする日となっている。その際にチョコレートを贈ることも分かっていた。もちろん、この茶色い粒がチョコレートであることも。

知らないのは、昨日の日付ぐらいである。

「ん？　右の方に何か挟まってるな」

リーナはチョコに添えられているメッセージカードを見つけた。手に取り、そつと開いてみる。

書かれた文字を読み上げた瞬間、自分の心臓が急に速く打ち始めていることに気がついた。それと同時に、彼は新しいケガをしてしまったようだ。

「こんな時に鼻血かよ……！？」

手で受けながら、続きの文章を読み進めていた。

——大好きなリーノへ。

毎日ひたむきに頑張るあなたの姿を、これから応援したいです。何も教えてくれないから、今回はいろんな甘さのチョコをそろえておきました。どれがおいしかったか、今度は教えてよね。これからの参考にしてみるから——

「今度から、どんな顔して会えばいいんだよ……」

バレンタインのニドリーナ（後書き）

読み返してみた感想は「何これ・・・？」でした（苦笑）

駄文を投稿したつもりもないんだけど、恋愛を書いたつもりだったので、あちこちに漂う文学の臭いには、書いた自分が笑ってしまいう状態。読んでくださった皆様には本当に申し訳ないです；

書いている途中、リーノとリーナを書き間違えることが多々。今でも間違えていないか不安になっています。パツと見た感じではあんまり差を感じないんですね。

恋愛を題材にしたとき、似合うポケモンはたくさん該当するとは思いますが。とはいえ、ニドラン系を選んだのはありきたりだったでしょうか？

初めて書いた恋愛がこれとなると、ちょっとトラウマになりそう…。

ちなみに、薄紫の花とはローズマリーのことです。

ポケハン学園バトル部の宿泊行事（前書き）

原作1：ポケットモンスター・モンスターハンター

原作2：フォックの集会所

ジャンル：文学

フォック様の作品「フォックの集会所」の2010年 06月 25日更新分の二次創作です。

参考元作品では多数の作者様の登場人物が出てきますが、こちらの作品での登場は無許可であるため、登場人物の過半数の名前が登場しません。ご了承ください。

ポケハン学園バトル部の宿泊行事

ー・フラグ

「えっ、今日の夜にお泊り会ですか？」

高等学校の校舎を、夕日が赤く染めていた。その背景にオレは染まりながら、部活の帰り道を先輩と一緒に歩いていった。

突然、隣にいた先輩が宿泊会を開くといった内容を言い出して、オレは驚いた顔をしながら立ち止まり、先輩のほうを振り向いたのだった。

宿泊会といえば、友達の家泊まり、プライベートの時間を共有するイベントのことである。夕食を一緒に作り、夜はみんなで遊んで、就寝前には枕投げ。深夜も起きていたら、めったにできない話題を繰り広げる。

いかにも「羽を伸ばす」という内容であるのが宿泊会の基本。けれど、生真面目な先輩がこんな企画をするのだろうか。疑問に思ったオレは、もう少しだけ詳しく聞いてみることにした。

「それは、部活のミーティングか何かですか？」

「ははっ、リザレは真面目だな！」

真面目な先輩から真面目と評価されても、想像がつかなくて納得できない。先輩から見たオレの姿って、いったいどんな性格をしているのだろう。何はともあれ、今回のイベントはもう少し娯楽を含めた目的ということになる。

「じゃあ、気分転換に？」

「そうだな。たまにはみんなもリフレッシュしたいだろ？ 必要な休憩をとるのも、鍛錬の一部。みんなが集まれば、コミュニケーション

ヨンも図れるしな」

「ああ……それもそうですね。さすが、ラッシュ先輩です」
みんなが集まれば。その言葉が胸にへばりついた。先輩と目が合
って、急いで表情を整える。

「ん？ リザレ、今日は何か用事でもあったか？」

「あ、いえ！？ そうですね、オレもありません。お泊り会、楽し
みですよ」

承諾の返事をする、先輩はニコニコとして歩き始めた。よっぽ
ど楽しみなのだろうか。たしかに、羽を伸ばすのは良いことだし、
他の部員メンバーと話すチャンスというのはそうそう無い。これを
機に、みんなとの結束力を高めようというのであれば、この機会を
生かすほうが得策である。けど、オレにはちよつと疑問が残ってい
た。

「何だか、乗り気にならない。どうしようかな……」

悶々と考えていると、いつの間にか先輩は先のほうに行ってしまう
だったので、オレは慌てて駆け出した。

暗闇が広がる空に、大きな満月が堂々と姿を出していた。その周
りには、月のまたたきに応えるように、たくさん小さな星が輝い
ている。時間が立てば経つほど、その星の数は多くなっていった。
先輩と一緒に帰っていたオレは、そのまま部屋にお邪魔することに
し、集合の時刻まで空を眺めていた。

「まあ、リザレは俺の部屋なんて見慣れてるから、そんなにテンシ
ヨンは上がらないか」

準備に一区切りをつけた先輩が、オレを気遣って話しかけてくる。

その後ろには、既に到着している部員が二人居た。先輩の準備を引き受けている。

「そうですね。先輩の部屋に居候させていただいてますから、もう見慣れてしまったのかもしれませんが」

同じ部活のメンバーが、先輩の後ろでせつせと準備している姿が見えるたびに、自分の気持ちが沈んでいく。理由は良く分からないけど、誰かと居ると自分の心はへこむ。オレはこの自分の法則を丸覚えしているから「一人の時間が好きなんだ」って考えるようにしている。

確か、男性心理だと一人の時間を好むのは当たり前という結論に達してたと思う。道行く相手にプライドを張って気疲れするから、弱気で居てもいい、肩の力を抜く時間が必要なんだって。ゆっくりと休められる時間を求めたり、受け止めて勇気付けてくれる相手を探すのも、ここに起因しているんだとか。

「いや、そういうわけじゃないんだよ……」オレは唸った。

オレも男だから、誇りを重んじる相手の気持ちが分からないわけじゃない。オレだって、疲れてても誰かそばに居れば、平気に笑ってみせることはよくある。心配かけたくないから。

ただ、一人の時間がいいというのは、それはあくまでも休憩のため、というのが一般論らしい。休憩が終われば、大抵は誰かのところへ関わろうとする。いつまでも一人だと、孤独に思ってしまうからというのが理由のようだ。

オレには、それが理解できなかった。たしかに孤独になれば自分の苦手な事がそのまま大問題に発展するから心配ではある。しかし、逆を言えばそれぐらいで、自分にできないことが差し支えない程度のものであれば、誰かと居る必要なんて感じなかった。

それに、誰かと一緒にいれば、気を遣う。親友でも家族でも、ど

れだけ親しくても礼儀というものがある以上は、ね。

「先輩も、せっかくの休みぐらい部員達のことを忘れて、ゆっくり羽を伸ばせば良いのになぁ……」

オレは思ったことを口に出した。先輩が横に居るのを思い出して、慌てて口を両手で押さえる。

「リザレ、さっき何て言ったんだ？ 俺を呼んだようにも聞こえたが」

「な、何でもないですよ！ さ、オレも準備を手伝いますから」

二・「予想通り」という悲しみ

無事に参加者全員が到着したのを確認したオレは、必要の無くなった「参加者出欠確認リスト」をテーブルの端に放り投げた。ひらりと着地した用紙にもう一度目を通すと、そこには全員分の出席欄にチェックマークが入っていた。

しっかりと見えたわけではないのだが、管理していたのは自分。だから、嫌でも全員出席なのは分かっていた。部員が全員居ると思うたびに、胸が押し付けられるような窮屈感に襲われる。

放り投げた紙に目を向けたとき、ふと何か違和感を覚えた。

「あれ、今……空欄があったような……」

部屋を見渡した。予定されていた十二人の部員と主催者の先輩一人。むせかえる男子部員のオーラに咳き込みつつ、オレはしっかりと数を数えた。一体誰の分を書き漏らしているのだろう。もう一度確認をとろうと思い、オレはテーブルに置いてあった一本のボールペンを右手で握った。

そのときだ。二人の部員の声が重なって響いた。

「今夜はパーッと行くぜえ！」

ビクツと肩を震わせて、オレは声のするほうを振り向いた。

「あれは……リオレウスの二人だね」

オレは出欠リストを拾い上げると、そっと二人の出欠欄を確認する。しっかりとチェックがついている。

黙々と準備をする部員にとって、大はしゃぎで飛び跳ねるリオレウスの二人の姿に苛立ちを覚えるものも居た。

「うつせえ！ テメエらも手伝え！」

先輩と一緒に準備を進めている部員からの苦情。まあ、当然だね？ オレはその部員を生真面目だけど短気という覚え方で、チェック欄にしっかりとマークが入っているのを確認した。その部員は先輩に呼び止められ、夕食の支度へと戻っていった。

オレも手伝ったほうが良いかな……と思ったが、自分の役目をまづ終えなければならぬ。クルリと向きを変えて、隣の部屋へと視線を動かした。テレビが置いてあり、大画面に映し出されるゲームに、四人の白熱している姿があった。

「あー！ くそおおっ！」

「負けた……」

「マジかよ……」

「俺、こんなにゲーム強かったのか？」

何をしてるんだろう？ 気になって覗き込もうとして、オレは首を横に振った。気持ちを落ち着かせてリストを見ると、その四人はしっかりと出席欄にチェックが入っていることが分かった。

負けた部員のうちの一人は悔し涙まで流している。大げさだよ……と心の中でため息をつきながら、オレは視線を反対の部屋に動かした。二人の部員の姿が確認できる。

「やっぱヤンキーの奴最高だよな、兄弟」

「お、おう」

仲良さそうに二人でテレビを見ていた。しかし、どんな番組を観ているのか、ここからでは先ほどと同様に確認ができない。仕方なく諦めると、オレはテレビを見ている二人がチェックが入っているのを確認した。

「ん？ ちょっと待つてよ……」

今更気づいたけれど、先輩の家にはテレビが二つある。確か、先輩は一人暮らしのはずだけれど、一体何に使っているというのだろうか。

もちろん、同時に使うはずがない。何せ、違う部屋に一つずつあるのだ。家族世帯などの二人以上で生活を営んでいるときは役に立つが、一人暮らしで複数個配置する意味はあるのだろうか。今でこそ、オレは居候させてもらっているの、そのテレビは存分に生かされているような気もするが。

それに、この間取りはいささか不自然だ。ざっと見渡しただけでも三部屋あるし、奥にはまだ沢山の部屋がある。一人で生活するには広すぎるような気がしてならない。

まるで、誰かを誘うのを前提にしているように感じた。

オレは気を取り直して、視線を目の前に動かした。

「……だったんだ。って……リザレ、話聞いている？」

突然、自分の名前を呼ばれ、オレの心臓が飛び跳ねた。

「あ、そうだ。オレ、今は会話の途中だったね……」

自分の世界から慌てて現実世界へと戻ってくると、オレとあと二人が向き合うように座っていたのを確認した。自分を含めて三人で語り合いをしているところだったのを、急いで思い出す。そして、とってつけたように相槌を打った。

「へえ、辛いことあったんだね」

確か、自分自身の辛い過去の話をしてるんだったね。オレは苦し紛れに笑顔で答えた。

「リザレと同じぐらい辛いんだ」

「二人とも苦労してるんだね」

怪訝な顔をされつつも何とか許してもらい、オレは目の前の二人のチェック欄を確認した。しっかりとマークがついている。

これで全員のはずだ。最初の空欄の予感はずいぶんあったのだろうか？ 最後にブラツと確認する。ある、ある、ある……と、印の有無を確認する。すると、一箇所だけ飛んでいるのが分かった。

「あれっ、確かに全員確認したんだけどなあ？」

横に視線を動かすと、チェックの入っていない部員の名前が浮かび上がってきた。

リザレ。

「あ、オレ……？ オレ、自分のチェックを忘れてたんだ？」

呆気ない結末に、オレはうつすらと涙を目に浮かべたのだった。どうして、自分のところに印をつけていなかったのだろうか。ペンをとって、機械的にチェックマークを入れた。

もう一度確認。全ての項目にチェックが入っているのを確認し、オレは胸を撫で下ろした。

「それにしても、今夜はうるさくなりそうだなあ」

改めて、完成させたリストを見てみた。十三名の名前がそこには並んでいた。それに偽ることなく、目の前の光景には十三人の姿。一瞬だけ、めまいを覚えた。

「おーい！ご飯できたぞ！」

めまいから立ち直り、声の主を探した。先輩と一緒に夕飯の準備を進めていた部員の声である。

そうだ、まだ娯楽の時間じゃない。オレは配膳担当を確認するために、脚に力を込めて立ち上がるうとした。しかし、それよりも先に、目の前を何者かが飛び跳ねていった。

「メシいいい！」

リオレウスの二人だ。丁度いいや、配膳は彼らに任せよう。そう思った矢先。

「お前ら！ 危ねえだろ！！」

ドゴツと鈍い音に、オレは思わず目を瞑った。おそろおそろ目を開けると、そこにはぐったりと目を回しているリオレウスが、二つほど転がっていた。

「……配膳、手伝うよ」

オレは何も見なかったと心の中で念じると、彼らを踏まないように台所へと移動したのだった。

三・彷徨い

ふと、窓を見上げた。夜空には相変わらずの満月が、暗い夜の中で堂々と居座っている。横には雲がかかっており、周りの小さな星々が隠れてしまっていた。満月の夜は明るいが、それだけの夜空とというのは、どこか足りないような気がした。暗闇のなかの、たった一つの満月。

「んー、夜の風も気持ち良いな」

目を閉じて、少しだけ風を頬に当ててみる。少し肌寒いくらいで、そのすがすがしい冷たさが、気分を白紙に戻してくれる。普段ならこの時間は静かなのだが、部員たちの雄叫びに似たはしゃぐ声が、心臓に響いてきて、気持ち悪い。

溢れてくるため息を吐き出して、リザレは窓を閉めた。

「リオカー、おもしろえ」

上機嫌な声が聞こえた。パーッと騒ぐだの、メシだの、ひとつひとつがうるさいリオレウスの一人、レウトの声だ。

「リオカー？」

オレは誰も居ない空間に向かって、素朴な疑問をもてあました。そういえば、みんなは何をして遊んでいるのだろう。ゲームだ。「リオカー」というゲームで遊んでいるのだろう。ふと、はしゃいでいるレウトと目が合った。

「おーい、リザレ！ 見てみる、このプレイすげえぞ！」

「う、うん……」

程なくして、レウトもゲーム画面に釘付けになっていった。とりあえず返事をしてみたものの、十人という集団を見た途端、足がすくんで止まってしまう。彼らには申し訳ないけれど、自分は少し席を外そう。寂しくてもいいから、もう少し静かな場所がいい。

しかし、一人だけ席を外すのは、集団行動の枠から逸脱してしまうため、あまり良くない。オレの姿が見えなくなること、変に騒がれるのも困る。気分は優れないけれど、しばらくこの場に居ておこう。オレは立ち尽くしたまま、みんなのことを遠目で眺めていた。

「マジすげえな！？」

「まあな」

みんなの騒がしい声が遠くで聞こえる。何もしていないと、聞こえてくる声を意識しなければなくなる。何かしよう、何でもいい。頭を捻って考えていた。

ふと、オレは先輩の姿を確認した。

そういえば、先輩は気分は悪くないのだろうか？ もちろん主催者なのだから、この状況を狙ってやっていると考えられる。顔色を伺ってみると、先輩はみんなの姿を見ながら柔らかく微笑んでいるのが分かった。

「うれしそうだなあ、ラッシュ先輩」

これだけの部員達が、慕って先輩の部屋まで来ているのだから、部長という立場の関係上、誇らしい事実なのかもしれない。

でも、ちよつと待つて？

たしか、帰り道で目的を聞いたときは、リフレッシュが目的だと先輩は言っていた。だから、今回は部長と部員という関係というよりは、友人関係のものに近いように思える。

それなら、もっと部員達と混じって遊べばいいようにも感じるけれど、先輩はみんなの白熱する姿を見守りながら、機嫌が良さそうにニコニコしている。

やることも見つからないオレは、先輩に軽く話しかけることにした。

「先輩、どうしたんですか？」

あまりにも嬉しそうだったので、オレは思わず直球の疑問をぶつけてしまった。クルリと先輩が向きをこちらに向けると、そのリザードンらしい顔つきを和らげて、いつもより明るい声で答えてくれた。

「ちよつと考え事をしてな」

「考え事ですか？」

そっか。みんなのことを眺めながら、それに関わることを考えていたんだね。オレも笑顔で応じた。

普段なら、この場に相応しないことを考えていても不思議ではない。けど、今は先輩は主催者としてここに立っている。それを踏まえると、この場に無関係なことを考えながら微笑むのは不自然な気がしてならない。

けれど、今の先輩はイベントの進行を部員達に任せていて、ゆつくりと眺めている。そんな状態だ。何か過去と照らし合わせながら考え事をしていたのかもしれない。

「……そういえば、先輩の過去とか聞いたことはありませんね」

オレは思いついたことをそのまま先輩に伝えた。

「そういえば、まだ話したこと無かったか？」

先輩は細めていた目を開いて、オレの方を見つめた。その弾みで目が合う。オレは思い切ったはずねてみることにした。

「あの、よければ先輩の過去について聞いてみたいのですけど、いいですか？」

先輩は、オレの質問を受け止めると、頷いて応えようとした。

ところがその時、先輩よりも先に他の部員の声が飛んできた。

「そっだ！ ラッシュの過去って気になる！」

レウトの声だ。どうして彼はいつもこうやって物事を大きくしてしまうのだろう。オレは肩をがっくり落としながら、みんなのほうに顔を向けた。

「俺も！」

「たしかにラッシュの過去って気になるね」

わらわらと部員たちが先輩に詰め寄ってきた。その迫力に押されていたのか、オレは先輩よりも後ろに下がってしまった。

「はあ、しゃあねえな」

先輩も同じように、ガックリしながらため息をついていた。こん

なに大げさにしてしまつてごめんなさい。オレはおそろおそろ先輩の顔をうかがった。

ところが、困った素振りを見せながらも、先輩の口元は笑っていた。部員達の方に大きな体を向けると、一人一人の顔をゆっくりと見回していた。

「そんじゃ、みんな聞いてくれ。さて、まずは何処から話すか……」
オレもゆっくり話を伺おう。真剣に耳を傾けている部員たちの気を削がないように、なるべく静かに着席した。

しかし、ここで黙ってられないのが、高校生の元気良さである。
「そっぴゃあ、俺がポケハン高校に転校してから、お前瘦せたよな？」

先輩と同じクラスの部員が、親しそくに突っ込みを入れる。ラッシュ先輩がピクリと反応した。

体型については何か気になる点があるのかもしれない。バトル部の部長というだけあつて、威厳を損なわない鍛え抜かれた肉体を持っている。その反動で体重が重くなるのは仕方ない話だ。総合的に見れば、かなり健康的である。

「やせていた？」

他のみんなも、この異変に気がついたのだろう。あちこちでザワザワと騒ぎ始めた。それにとうとうレウトが巻き込まれ、ひやかし精神に火がついた。

「お前！ 元々はメ……」

一体何を言うつもりだろう？ オレはレウトの方に顔を向けた。そのときだ。

横から何らかの物体が目にも留まらぬスピードで突き進み、レウトの額を直撃した。

「余計だ！」

「ぶはっ！？」

レウトの悲鳴を最後に、部屋全体の時が止まった。先輩からげん

こつを受けるレウト。バタリと虚しい音だけが鳴り響いた。

「れ、レウト！ 大丈夫？ まずは診察を……」

もしかしたら脳内出血を起こしているかもしれない！ 救急担当であるオレは、命の危険を予想してすぐに治療のために行動を開始した。

ところが、それは先輩の手によって止められてしまった。

「しばらく痛い目を見させておけ。いい薬になるだろ」

「で、でも。状態だけでも確認しておかないと……」

「大丈夫だ。あんなヘタレでも一応リオレウスなんだ。そんなにヤワな体じゃないのは、リザレも知ってるだろ？」

「ま、まあ。確かに頑丈な鱗を持っています……」

レウトのことは心配だったが、ゆっくりと深呼吸をして気分を切り替えることにした。まだ高校生だ。若いから、多少のケガがそう簡単に重症化することもないだろう。

悪化したときは、そのときに改めて治療をしよう。オレはそう自分に言い聞かせた。あまり、先輩の機嫌を損ねさせるのも忍びない。「まあ、あまり時間が遅くなるのも悪いですから、レウトのことは放っておきましょう。先輩のこと、もっと聞きたいので」

サラッと酷いことを言ったような気もしたが、オレはゆっくりと笑いながらレウトの側を離れ、静かに床に座った。周りの目が若干怯えているようにも見えるが、気にしない、気にしない。

「そうだな……。じゃあ、俺の生い立ちから始めるか」

四・先輩の事情

「電気消すか？」

「ちよつ、お前！ 暗いだろ、怪談じゃねえんだからさ！」

「か、怪談！？ 怖いよー……」

「ラッシュの尻尾の炎がロウソクっぽくて、雰囲気でてるよなあー」
「お前ら、静かにしろ！」

照明が消えても、お互いの顔がうつすらと見える。友達とまでいなくとも、顔を知っているだけで、暗い部屋でも微笑んでいられる自分にビククリするオレがいた。

何でこんなに明るいんだろう？ 騒がしい部員たちをよそに、オレは窓のほうを向いた。

確かにロウソク……じゃなくて、リザードン特有の尻尾の炎が、暗い部屋のなかで光っていたのは事実。しかし、それ以外にもこの部屋を照らしてくれている光がある。満月だ。満月は星たちに囲まれて、にぎやかに瞬いていた。周囲の雲も、すっかり晴れている。

「この賑やかさは魅力の一つなんだろうけどね……ゴホッ」
胸が苦しくなり、軽く咳をした。

現実逃避も兼ねて、オレはしばらく夜空に見とれようとしたが、部屋の照明に電気が通り、辺りは明るくなった。それに気づいて、オレはクルリと体の向きを戻した。

「俺は生まれた頃から、親父とおふくろは仕事や修行に行っていて、俺はいつも一人だったんだ」

先輩は、部員達一人一人に目を合わせながら、ゆっくりと語り始めた。オレも、先輩の呼吸に合わせてゆっくりと目を閉じた。

「ドサイドンのセバスがいたから、俺は良かったと思っていた。だが、セバスも色々と忙しかったみたいで……俺はいつも一人だった」

生まれたときから、先輩はずっと一人だったという。

つまり、経験が無いんだ。家族と一緒に暮らしたときの、いろんなイベントやトラブルを。セバスが居たとはいえ、セバスは家族じゃない。セバスを雇えるということは立派な家計なんだろうけど、

お金によって生かされているだけの人形として、先輩は幼少期や児童期を過ごしたことになる。

親が子どもに接触しないということは、子どもの心の声に耳を傾けないのと同じである。それが仕事だとか非の打ち所が無い理由だと、なおさら。先輩はずっと寂しいのを我慢していたんだ。

「小学生高学年の頃か……。一応、それまではヒトカゲだった俺は、リザードに進化したんだ」

「へえ、俺と同じ姿になったんですか」

妙な親近感を覚え、オレは思わず声に出して相槌を打ってしまった。突然の声に、みんなの視線が一斉にこちらに集中した。恥ずかしくなったオレは「ご、ゴメンゴメン」と、笑いながらごまかす。

それにしても、小学生のころに進化したとは早い話だ。進化は、身体能力の成長に伴って行われるのだが、オレがリザードに進化したのは去年くらいの話である。小学生の間に進化できるのは、バトルのセンスがあることに他ならない。

「続き話すぞ？」

「あ、はい」

「頑張つてバトル大会で優勝したりもしてみせたさ。けど、それでも俺はひとりぼっちだった」

「誰か、誉めてくれる人とか祝ってくれる人はそばに居なかったのですか？」

オレは、さっきの恥に染まってしまったのか、とうとう平気に質問するようになった。

先輩も、ふと目を開いてオレの質問に答えてくれた。

「そりゃあ、そばに居た奴は何か言ってくれたような気はするが……」

「ああ、そういうセバスが一言だけ」

「そつ、ですか……」

これだけ孤独だと言ってるんだ。そのセバスの祝辞も、仕事にの

つとつた挨拶みたいなものだったのだろう。先輩は、そのとき本当は何を期待して大会に臨んだんだろう。優勝しても心に空白があるのは、何が原因？ オレは頭を捻りながら先輩の言葉に耳を傾けていた。

「俺はストレスに限界を感じて、ついには……」

ゴクリ。オレは続きの言葉を待った。

「中学で、俺はつかかる奴に暴力をふるう不良になったんだ」

先輩の手が震えていた。おそらく、誰かに暴力を働いたときの感覚を思い返しているのかもしれない。

オレは暴力という世界を知らない。昔から児童心理学とか犯罪心理学には興味があつて、いじめが発生するタイミングというのを何となく掴んでいた。本当の暴力とは避けることができないものだが、そもそもそんな大事になる前に未然に気付くのが、基本となっている。

それはともかく、ストレスが溜まりすぎた先輩は、悲鳴をあげる勢いで不良になったのかもしれないね。周りがもう少し早く気づいていれば……。オレは少し同情を感じながら、静かに声を拾い上げていた。

「それから、こんなこともあつたな……」

——「もぐもぐ……。おかわりくれ！」

「坊ちやま、そんなに食べてはなりません」

「うつせえんだよ！ どうせ、セバスは俺より仕事とるだろ！」

「しかし、食べ過ぎると健康の心配が懸念されます」

「俺のことなんかほつといってくれ！！」——

「俺はすごくグレててさ、リザードのころから太ってたな」

先輩は頬を掻きながら天井のほうを向いていた。オレも少しだけ床に視線を落とした。

「でも、今はもう……」

トレーニングを積んで、随分とがっちりしてますよね。うらやましいくらいに。そうオレは続けるつもりだったが、別の方から勢いのある声が飛んできた。

「だから、ラッシュはメタ……」

レウトの調子のいい声が響いたかと思うと、先輩が突然床を蹴つて、レウトの額をめがけて拳をストレートに直撃させた。

「懲りない奴だな」

パンパンと手を払って、何事も無かったかのように戻っていく。後ろには、ぐったりと気を失っているレウト。

「ゴホン。つ、続きを話すぞっ！」

レウトはさっきから何を言おうとしているのだろうか？ どうも、先輩が動揺している原因を知っているような気がして仕方が無いのだが、肝心のレウトはタンコブを作って気絶していた。

まあ、後で質問してみよう。オレは、先輩の話に意識を戻すことにした。

「俺は絶望的になって、闇雲に他の不良どもを殴ったりしてな。：

…モモにも手を出したな。それにサクラにも迷惑かけちゃった」

モモ、サクラ。漢字に当てはめると、桃、桜。いや、先輩がいきなりこんな話をするのも不自然だ。何のことだろうと思案していると、横で一人の部員が声を上げた。

「あの時はすぐくむかついたからな？ 俺、その時はお前を倒したかったぞ、龍炎のラッシュ」

オレは部員のリストを思い出した。たしか、部員の名前にはモモという欄があったはずだ。名前を呼ばれたモモは、突然思い出したように、先輩を見つめていた。

「久しぶりに聞いたな、俺の異名……」

「龍炎のラッシュ、ですね？」

「ああ、そうだ」

そのときの先輩の顔は、どこか遠くを眺めるような細い目で力なく笑っていた。異名をつけられるくらいに暴れまわっていたのに、それでも心の隙間を埋める事はできない。そういうことだろうか？もし、異名をつけられるくらいに暴力を振ることで解決できたのなら、この過去話は晴れやかであるはずだから。これだけ虚無な先輩も、なかなか見られない。

一体、何があったのだろう。

それと、もう一つ。サクラという名前の存在も確認しておかなくちゃいけない。

「あ、そうそう先輩。サクラさんといえば、たしか先輩の彼女の方でしたよね。合ってますか？」

「んっ！？ いや、サクラはただの幼馴染……。それが……。どうした？」

「い、いえ、あまり紹介なさることがありませんでしたから、確認をしておきたかったです。暗黙の了解というのも、すっきりしなかったものですから」

オレは、それ以上言及するのを控えることにした。先輩は真面目だから、相手に迷惑をかけるのを極端に嫌う性格を持つてゐる。彼女に迷惑をかけたということを深く聞くのは、せめて、他に誰もいないときにしよう。

第一、明らかに先輩の反応が乱れていたから、続けられる状態でもなかったけれど。

もういいか？と先輩が訊^きいてきたので、オレはゆっくりと首を縦に振った。

「『龍炎のラッシュ』俺はそう呼ばれるようになった。でも、親父達は忙しく帰ってこない現実是不変^{ふへん}わらない。どうせ俺のことなんか

……。俺はそう思っていた。そしてある日、俺はあるポケモンと出会ったんだ」

そういえば、以前にも先輩から少しだけ聞いたことがあった。今はこの部活の指導員の話、つまりコーチにあたる役を務めている存在。昔、先輩はコーチから喝かつを入れたと聞いていた。コーチの名前は確か……。

「それが、ゼルスさんだった……ってことですね？」オレは先輩の目を見つめた。

「ああ」

五・摩擦の接点

夜も随分と更けてきた。そろそろ深夜に差し掛かる頃である。夜空の星も鮮明に輝くのが確認できる。月と一緒にまたたいて儚くも美しい星、満月の輝きに負けまいと必死に光る一番星、少し離れた所でマイペースに輝いているのは三等星だろうか。

しかし、見えるものだけが真実とは限らない。そもそも、星と星の距離は何万光年という眩暈めまいがするほどの間隔があるのだ。つまり、今輝いていると感じるこの星の輝きは、何年前か。いや、何万年前の光か。もしかしたら、今はもう存在していない星の光かもしれない。けれど、そんな暗い事実を隠すかのように、オレたちには美しく輝く光として見えているのである。

オレの笑顔も、そんな星の光と似たようなものだったのかもしれない。みんなと居ることがここまで苦しいとは思わなかった。胸をさすりながら話の続きをうかがった。

「ゼルスさんと先輩に何かあったのですか？ 気になります」
オレは努めて明るく言った。

「ゼルスさんの言葉で、俺は不良から足を洗ったんだ」

先輩は、ポツリポツリと記憶の糸を手繰り寄せるように、ゆつくりと言葉を紡ぎだした。

——そう、あの日は印象的だった。

「お前はなぜ暴れる？」

分かったようなセリフが癪に障る。

「うつせえよ！！ 俺は一人なんだ！！ テメエに付き合わされる暇はねえんだよ！」

「一人…そうやって他人を巻き込んで自分の怒りが収まるのか？」
こいつも、俺の苦しみなんか分かってくれない！

「うつせえ！！ テメーに俺の気持ちかわかるか！ うらあつ！！」
目障りなんだ！ 勢いに任せて殴りつけた…はずだった。

「それで済むわけないだろ…」

当たらない。俺の拳が空しい風音をたてた。

「チクシヨウ！！ なんだあたんねえんだよ！！」

俺の言葉は聞こえてるはずなのに、手ごたえが無い。何度も外しているうちに、俺は悲しみに包まれてきた。

「すまない…… よっ！」

「ガッ！？」

もう、どこから痛みが来たのか分からない。暴れる俺の体が、ゼルスゼルスの力によって、やっと動きを止めた。

「何だよ、俺にとどめさすのか？ …… いいよ。俺はもう、力におぼれたんだ……」

なぜ暴れるのか？ それは俺自身でも分からなかったんだ。この苦しみをどうやって伝えたらいいか、分からなかったんだ。

そもそも、自分のこんな脆くて弱い面を自覚しなくなった。ただ、目を逸らしたかっただけなんだ。どうしようもなかったから。

「ふざけるな！」

「くっ!？」

突如、俺の顔面にゼルスの拳。俺は殴りつけられた。

俺は頭が真っ白になった。どこを見れば良いのか分からなくなつた。そんな意識朦朧とした中で、こんな言葉が聞こえてきた。

「力はそんな風に使うもんじゃない! 力は、仲間と大切な者のために使うんだ! お前にはまだ希望がある! 自信を持て!」

少し間隔を空けて、穏やかな声が続いた。

「そして、バトルは楽しくやるもんだ」――

先輩が深呼吸をする。それに気がついて、オレは目の前に視界を戻した。

「俺は気絶していたようで、目が覚めたときは家にいたよ。セバスがつきつきりで看病してたみたいなんだ。『どうしてなんだ、俺のことなんてどうでもいいくせに!』って本音をぶちまけてみたら……」
「なにいつてるんですか! 私には坊ちやまが大事なのですよ! ? 私には坊ちやまの事を大切に思っています! だから悲しまないでください! 私はいつでも坊ちやまの味方です!」だってさ。そんなセバスの真剣な眼差しに、俺は目が覚めたよ」

そうか、先輩は……そのときまで味方がいないと思っていたんだ。誰にも弱音が吐けなくて、いつも元気にしておかなくていけない環境は、かなりプレッシャーを受ける。

しかも、それは先輩自身の「分からない」と周囲との「すれ違い」で起こってる。身近にあることに起因するのが、オレには切なく思えて仕方になった。

「ラッシュ先輩は、一人じゃないです」
涙を流しながら、オレはそう伝えた。

「そつだよ！僕達がいるよ！」

「お前には色々と学べた…俺も仲間だ！」

「いい話じゃねえか！」

「それでも努力してすげえよラッシュ！」

「すげえよ！ラッシュはすげえよ！！」

「ラッシュも努力してがんばったんだな……」

「日々努力してるんだな」

部員たちも、弾けるように言葉を次々と飛ばした。

「俺は絶対にいつか倒してやるからな！」

先輩に因縁があるモモは一人だけ違ったことを言ったが、口元が笑っていた。それを見てオレはホツとする。

「みんな……」

先輩はみんなの言葉に胸一杯なのだろう、そこで声が止まった。この一体感が、先輩の求めていたものだったのだろうか。せつかくの休日を使ってまで得たかったもの。「友情」「安心感」「孤独の開放」といったものは、目には見えない。けれど、確かにオレの目の前では、それらが形となって先輩を勇気付けていた。

六・それは無意識

超新星爆発。光り輝く星に寿命が訪れたとき、星は最後に爆発を起こしてから消滅すると言われている。星は常に膨張し続けていて、ある一定の大きさになると限界を迎えるのだと言う。オレがここで胸の痛みが頂点に達したのも、我慢の限界だったということだろうか。

「感動シーンに水を差すようで悪いんだけど……」

部員達が先輩を激励する中、オレはヨロヨロと先輩に近づいても

たれかかった。

「リザレ、どうした？」

「ちよっとしんどくなってきたので、どこか別の部屋で……ゴホッ！？」

気がついてみれば、自分の意識はかなり朦朧もうちゅうとしていた。視界の焦点は合わないし、立っていられない。呼吸はかなり速くなっており、それに乗じて脈打ちもすさまじいスピードになっていた。

「マズい……なあ。オレ、心臓弱いから……ここまで脈上がると……」

「おい、リザレ、大丈夫か！？」

そんな先輩の言葉を最後に、オレの記憶はそこで途絶えた。

気がついてみると、月はすっかり位置がずれていた。直射月光になっでいて、オレはこれで目が覚めたのだらうか。

「あれ、ここは……」

「気がついたか。今の気分はどうだ？」

ふと、声が聞こえる。オレは上体を起こさず、顔の向きだけをクルツと右に向けた。声の主は先輩のようだ。

「あ、はい。もう大丈夫です」

「それならいいんだ。といっても、今はみんな寝てるがな」

時計を見ると、時刻は深夜だった。確かに、他のみんなはもう既に眠りにについているようで、騒がしい声は一切聞こえない。先輩が看病をしてくれていたようだ。寝顔とか見られたのだらうか。それがこの場に相応しない疑問だと気づくと、オレはすぐに首を横に振った。ごまかす為に「心配をかけてごめんなさい」と先輩に小さくささやく。

「そういえば、リザレ。お前は記憶喪失だったよな？」

「うん、そうですよ先輩。それがどうかしましたか？」

「あれから、何か思い出せたことはあるか？ 俺のことを先輩と呼

ぶ理由とかさ」

そう、オレは記憶喪失。ある日目覚めたとき、手元には自分宛の手紙が入ったカバンしか無かった。その資料に基づいてオレは自己紹介をしてきた。

すると、オレは先輩より年上ということが分かったんだ。

「ラッシュ先輩のことを『先輩』と呼ぶ理由ですか？」

そっか。オレはまだ話したことが無かったつけ。

空に輝く星をチラリと見た後、オレは先輩のほうを向き直ってゆっくりと話し始めた。

「では、順番を追って話しましょうか」

—— 目が覚めたとき、「またか」と思ったよ。

昨日はどこで寝たのかを覚えていない。気がついていたら見知らぬ場所。あの日は二回目の体験だった。今回は記憶が無くなったわけではないらしい。しかし、昨日寝たはずの場所と今の場所は明らかに違っていて、オレは恐怖を感じたんだ。

目が覚めたとき、急いで今の場所を確認してみたら、地面じゃなくて床だった。だから、ここは何か建物の中なんだって。独特な空気の香り……かと思いきや、部員達の汗臭い匂いだったね。今のバトル部の部員たちと、そして先輩が。オレは、一瞬でその周りに囲う者たちが味方なのか敵なのかを決めなくちゃいけなかった。

でも、幸いなことに目を見ればすぐに分かった。「あ、この方達は子どもだ」って。オレも同じ子どもだけど、それよりも幼くて、でも、真っ直ぐで力強い目。この純粋な心にどう対応しようか。とりあえず、一旦警戒するのはやめよう、って考えることにしたんだ。

「お前はリザレって名前か？」

それが、先輩の最初の声だったね——

「オレは、記憶を辿っていくと、一年も有るか無いかという程度の

思い出しか無いんです。特に、ラツシュ先輩のいるこの世界で生きてきた時間は数ヶ月。先輩は、もうこの世界で十六年過ごされてるんですよね？　ですから、オレにとってラツシュ君は『先輩』なんですよ」

「でも、それじゃあ俺に限らず、レウトやモモもみんな先輩ってことになるよな」

「それが、実はそうでもないですよ」

先輩が首をかしげる。オレ、変なこと言ったかな？　説明を続けた。

「その中でも、ラツシュ先輩はいつもしっかりしていて、前向きで、信頼できる性格をしているんだよ。頼りにしやすい、とてもリーダー的な存在だよ。オレなんかよりずっと『先輩』だよ、ラツシュ先輩は」

「褒めてくれてありがとな、リザレ。でも、俺はまだまだなんだ」

しばらくの沈黙が流れた。

この一分の間に、先輩は何を感じていたのかは分からない。オレは一人で、先輩へのプレッシャーがどの程度かを勝手に予想していた。

オレ自身の性格からして、誰かに頼って生きていくのを苦に思わない。それは、相手が年上だろうが年下だろうが、あまり関係はない。そりゃあ、赤ちゃんとまでなれば頼るのは難しいが、ラツシュ先輩ほどになれば、一つぐらい長所や特技を持っているものである。

先輩の場合は力仕事が得意。基本的に肉体的な成長は割と早いので、ラツシュ先輩の頃には一般の大人を超える体力があっても不思議じゃない。先輩の体はもう大人だ。逆に、オレはもともと体が弱いから、今でも体力的に子どもレベルに留まる。こうやって分野ごとに能力を年齢別に見てみれば、オレよりも先輩のほうが本当に先輩らしい一面を持っているのは明確だった。

しかし、精神的な話はどうかだろうか。

先輩はさつきも「俺はまだまだ」とハッキリ言っている。つまり、課題が山積みなのだろう。その分だけ、問題も多発するし、一人では解決できない分野だって存在する。

けど、今もオレがうつかり言ってしまったように「先輩は頼りになる」という、全面的に「大人である」というラベルを貼ってしまっている。これによって、先輩は余計に弱みを見せられない状態になったのは言うまでもない。

これに気を取られず「俺にも苦手なことがあるんだ。お前に頼ることもある」みたいなことを何気なく言うことができるなら大したもの。でも、今の先輩に、その柔軟さはまだ見受けられない。全部、一人で解決しようとしている。

「そういや、リザレはこの世界に来て、まだ一年も経ってないんだっただ。大丈夫、俺がついてるからさ」

先輩は胸を張って力強い笑顔をオレに向けていた。

先輩……、きっとオレにも手伝えることがあるはずだよ？

「胸のほうは、もう落ち着いたか？」

不意に先輩が声をかけてきた。あ、そうそう。オレは倒れてて、みんなに心配をかけてるところだったね。元気をアピールするために、軽くガッツポーズをしてみせた。

まあ、例え起き上がれるとしても、今は深夜。特にコレと言った予定はない。

「そうか、それは安心した。じゃ、俺もちょっと寝てくるかな！」
先輩はオレが元気になったのを確認すると、すっと立ち上がった。この部屋から移動するのだろう。立ち去ろうとする先輩を見て、オレの胸がざわついた。

「ちょっと待つてよ……？」

そういえば、今日はとりわけ違和感を感じることが多い。それは、部員の間が騒がしくて、オレ自身の居場所に困っていたから。そう思っていた。

しかし、それはどうやら違うらしい。今、こうやって先輩と自分だけという環境で、先輩が立ち去って一人きりになれるはずのタイミングで、同じように居場所を失うかのような焦りを感じてる。

「ん？ どうした、リザレ？」

オレのつぶやきを聞いてくれたようで、先輩はくるりと顔をこちらに向けた。

「ううん、何でも……」

スツキリしない心境をそのままに、オレはハツキリしない口調で答えた。

慌てて「何でもないですよ」と言い直した。寝る時間を看病に当ててもらって、元気になるまで見守ってくれていたのに、冴えない返事というのも忍びない。急いで言い直したつもりだった。

しかし、この言葉は先輩には届いていないようだ。何でもないと答えたのに、先輩は体の向きもこちらに向けていた。

「リザレ、今日は楽しかったか？」

突然の質問だった。オレは自動的にスツと笑顔になる。

「ええ。皆さんの元気な姿、先輩の嬉しそうな顔を見ました。こんなイキイキとした光景を見れるのは滅多に無いですよ。本当に有意義でした」

本心からそう言った。嘘を考える暇も無かったし、隠し事をする意味も無い。実際、みんなとここまで触れ合うのはなかなかできない体験だった。

自分自身が言った内容を頭の中で繰り返す。うん、特におかしなことも言ってなさそうだ。

ところが、先輩はあきれた顔でため息をついていた。

「俺には分かるんだぞ、リザレ」

「な、何が、ですか？」

「意識的なのか無意識的なのか知らないが、リザレが嘘をついていることだ」

一瞬で手のひらに冷や汗を覚えた。何だろう、確かに本心から出た言葉のはずなのに、今のオレは動揺の顔をしていた。鏡を見なくても、口元が引きつってるのを感じられる。

「どうして、オレが嘘をついていると思われるのですか？」

「リザレの波動が暗い感じだ。有意義だとか楽しいだとか言ってる余裕なんて無いくらいに」

そうだ。先輩は波動を扱えるんだっただけ。と言っても、オレは波動がどういうものかを具体的に知ってるわけじゃない。

たしか、波動には数種類あったはずだ。文字通り、波の動き。波動を使える者にとってはさまざまな波動を感じるらしいが、オレみたいな素人が感じ取れる波動はたった一種類しかない。

感情の波動。つまり「空気」。オレは空気を読むことだけなら感じることができる。

感情が動かされるとき、生物の中には微細な電気が走る。表情をつくるためやしぐさをするための筋肉を動かすための電気。他にもホルモン分泌が行われて、神経系を刺激する。これらによって不快がコントロールされているのは、もう有名な話だ。

電気が流れるということは、そこには磁場が発生するということだ。磁場があるということは、その付近にある金属系はひきつけられることになる。そして、血液の中には鉄分が存在する。血液の中の鉄分がその磁場によって動かされれば、当然こちらも気分が悪くなるなどの異変を感じる。

異変の感じ方は、その磁場によって種類がある。相手のご機嫌なときと不機嫌なときは、感じられる異変が変わるんだ。もちろん、

感じるだけものだから、証拠なんてものは無い。最後の最後まで、予想の範囲を越える事は無い。

「俺は別に頭がいいわけじゃないから、リザレがどんな気分で居るのかは分からない。けどさ、帰り道のときから、みんなと夕飯を食って今に至るまで、リザレの状態は悪くなっていく一方だった。最高潮から普通に落ちたのかと思ってたけど、こうやって倒れる始末。普通から絶不調に落ちたと考えていいみたいだな」

「ごめんなさい。何だか悪いことをしたみたいですね」

本当に申し訳なく感じた。先輩はあくまでもみんなを楽しませようと思って、そして、先輩自身も精神的な元気を湧かそうと思って企画しているはずだ。こうやって睡眠時間を削らせた拳句、先輩を安心させることすらできない。

自分が情けなくなってきた。

「それは別にいいんだ」

しかし、先輩が続けたのは、謝罪でも怒りでもなくて、質問だった。

「リザレは、そんなに俺らと一緒に居るのがつらいのか？」

「えっ？」

七・違和感の正体

「つらいならつらいつてハッキリ言ってくれ。曖昧にされるのが一番困るんだ」

「ちょ、ちよつと待ってください」

そつえば、一番不可解なことがあった。オレ自身の行動そのものだ。

まず、オレは一人の時間が好きだという事と、部活に所属していることの食い違いがある。それに、一人になりたいことを自覚している事と、先輩や部員たちを観察している事との食い違いも。これらはオレ自身でも分らない違和感だった。

でも、一番分らないのは、部員達といった時の胸の苦しみと、先輩が立ち去る時の胸の苦しみが、見事に一致したことだった。

「確かに、オレは基本的に一人の時間が好きですが……」

何となくポツリと言った。一番の疑問を解決するために、いったいどんな命題を立てたらしいのか。それを探るための一言だった。

しかし、言った直後に激しく後悔する。さっきの先輩の過去の話を否定してしまうような気もしたし、今まで献身的に接してくれた先輩の配慮すら否定しているようにも感じ取れるから。

何より、先輩の広く大きな肩が一瞬だけビクツとしたのが、マイナスなイメージを与えてしまっている証拠だろう。オレは深呼吸をしてゆっくりと視線を外した。

「どうしてだ……？ 一人なんて、寂しいだけだろ！？」

大きな振動が頭に直接響いてくる。今度はオレが肩をビクつかせた。

「何で自分から寂しくなるようなことをわざわざ選ぶんだ！？ 孤独になつて良いことなんか無いんだ！ 分かってくれる奴は居なくなる、寂しさばかりが溜まってくる。そんな時間が好きだなんて、切ないだけだろ……？」

先輩の声は次第に落ち着いてきた。それを見計らって、オレはゆっくりと顔を上げてみた。月明かりが先輩の目元で反射して、キラツと光る。

「先輩？」

「いや……すまないな、リザレ。お前にこんな大声出すつもりも無かったんだが……」

「あの、オレがどうしてもわざわざ一人の時間を選ぶか、の話ですけど……」

「ああ、そうだったな。聞かせてくれるか？」

「分かりました」

記憶が少し曖昧だから、幼いころのオレを養ってくれたのは両親だったのか、近所の方だったのか、ボランティアの方々だったのか。昔のことは今でもあまり思い出せない。

胸にざわつく違和感を感じた、最初の記憶。

「なんで、こんな酷いことをするの？」

オレは差しのべてきてくれた手に向かって、そう叫んだはずだった。本当は、はち切れそうな思いを口に出したくて仕方がなかったけど、それを抑えつけるように、先に言葉が返ってきたんだ。

「キミのためにね、今日はおもしろいものを買ってきたんだよ」

そう言っ、オレが大切にしていたコレクションが、ガシャガシヤと音をたててゴミ箱へと払いのけられた。

「な、何してるの？」

一瞬、何が起ったのか分からなかった。慌てて棚を確認してみると、ホコリひとつない綺麗な空洞があるだけだった。愕然とした。「ねえ、ここに置いてあったものは？」

「もう要らないでしょう？ どうせゴミなんだから、捨てたって問題ないでしょ？」

オレの大切なものを勝手に捨てた。大切な物が無くなった悲しみを前に、オレは大声で泣き叫んだ。

「大切だから、とってあったに決まってるじゃん！」

気持ちを精一杯伝えたつもりだった。ところが、返答のほうは、オレのちっぴけな想像なんて軽く越えるものだった。

「私にとってはつまらないものよ？ それよりね、こっちのほうが

……」

何を言っているのか分からない。いや、言っている内容そのものは十分に理解したつもり。難しい言葉なんてどこにもないから。けれど、今の言葉はこんな場面で使うものだったのだろうか？
というか、言葉一つでここまで傷つくとは思ってもみなかった。

もう一つある。こちらにも、誰を相手にしていたのかよく分からないけど、さっきの高い声とは違って、低い声だったから、別の話だ
と思う。

「ねえ、どうしてそんなに平気でいられるの？」

ニコニコしながら相手は別の作業にとりかかろうとしている。
そこに、オレはそう声をかけたつもりだった。けど、これもやはり
言えずに終わっているようだ。

「大丈夫大丈夫。テストも終わったんだから、ノートなんてもう要
らないだろ？」

ノートには、確かに勉強の内容をまとめたものが記述されている。
しかし、そこには勉強とは別の内容——落書きとか、勉強とは違う
ひらめきとかが、同時にまとめられていた。

「大切にしていってねって確かに言っただけなのに、どうして破れた状態
になるわけ？」

「たしかに表紙はボロボロだし、中身は無残にも斜めに破れてて、
何書いているか分かんないけどさ。無事に終わったことだろ？ まあ、
これも終わりにしようぜ？」

「どこがどう無事に終わったというの？ あのノートには、大切なも
のがはさんであって……。必要だって言うからオレは……。」

「さて、今日はどこへ遊びに行く？」

「ちよつと疲れたから……。今日はオレ、ゆっくり休むよ」

「ついていけない。大切っていうのは、この程度の扱いなのか？」

家族とか友達とかの付き合いって、こんなもの？

疑問が膨らみすぎて破裂しそうになったから、オレは大人に相談
してみたことがあった。そういえば、その時の答えのほうがよく

ど意外だったかもしれない。

「世の中にはもっと不幸な目に遭ってる奴らのほうが多いんだ。俺の方がもっとつらい経験をしてきたぜ？ お前が弱いだけだろ。そんなこと考えてないで、次のことに目を向ける。お前は幸せな方だ」

「ああ、オレは幸せな方なんですか……？」

これといったいじめを受けてないし、そこまで窮屈な生活でもないし、生きる上で問題となる障害を持っているわけでもない。

こうやって地面の上に立って、呼吸できるだけで奇跡であって幸せである。大人から、そう力説された。

「オレの大切なものは、どうなってもいいの？」

「くだらないものは捨てて、新しいものに目を向けなさい」

「オレ、あんなに一生懸命お願いしたのに？」

「過ぎたものはしょうがないさ。明日は遊ぼうな？」

「オレのことは、どうでもいいんですか？」

「どうでもいいことでクヨクヨしてるからだろ？ もっと前を見る」

月明かりが突然無くなったので、オレは驚いて目を開いた。窓を見ると月が雲に隠れてしまっているだけだったので、ホッと胸を撫で下ろす。息を整えて、先輩の方を振り向いた。

「今はつきりと思い出せている過去の話って、これぐらいなんですよね。何だか、先輩みたいに不幸っていう感じの話ではないので、引き合いとして出すには気が引けるのですけど……」

あまりにも曖昧さに、オレは「一人が好きな理由」を伝えられたかどうか疑問だった。

けれど、自分ではつきりとわかった気がする。怖いからだ。身近な相手ほど、オレの大切なものを平気で壊していく。しかも、それに気付いてくれない。

それよりは「先輩」とか「部員たち」とかでくくって、しっかり

と距離を置きながら生活しているほうが安全だ。どこかで、無意識にそう判断していたのかもしれない。

先輩は床に視線を向けたまま、ゆっくりと深い声を出した。

「俺は、そんなことしない。リザレをそんな粗末にはしないからな……」

独り言だろうか？ オレの視線に気がついた先輩は、力のこもった眼でオレを見つめ返した。

「リザレ。リザレは俺を頼ってくれていいからな？ 俺は絶対に裏切らない」

ハッキリと言ってみせる先輩。しかし、オレは素直に頷くことができなかった。思い出したばかりだから、先輩もしかしたら……頼った瞬間に裏切ってくる可能性だってある。

その恐怖が、オレの口の封印から放たれた。

「それは、きっと先輩の善意ですよ。けど、いつもそれが相手にとって嬉しいことだとは限らないんですよ？」

「そ、それは……」

「先輩は正しいことをしているのでしょうけど。それがかえって、オレたちを傷つけていることがあることを、分かっていますか？」

「ち、違うんだ……」

口が止まらないだけでなく、涙も止まらなくなってきた。

「オレがみんなと居るのが苦手だと分かってたのなら、放ってくれば良かったじゃないですか！ オレの波動を感じ取れるなら、それぐらい気付いてくれてもいいんじゃないですか！？」

途中から、完全に愚痴だった。明らかな自分本位だけで構成された、わがままな発言。しかも、先輩の過去の経験を知っておきながら。これで、オレは最低な後輩になったわけだ。

その瞬間、脳裏に冷めた思い出が蘇った。

「幸せなクセに、リザレは贅沢だ」

そういえば、昔はみんなから、結局そう言われて別れることになったんだっけ。付き合いにくい、育て甲斐がない、やってられない。そうか、オレはまた繰り返してしまったんだ。

とりあえず、この重たい空気だけはどうかしないと。やれやれと重たい目を開いて、視線を持ち上げた。

ところが、先輩の返事は、これまた予想外な方向へと流れていった。

「ごめんな、リザレ。もつと俺が頭良かったら、こんなに苦しめる前に気づけたかもしれないな」

先輩は、オレの視線を避けて俯いていた。正直なところ、オレは怒られるか飽きられるかのどちらかだと思っていたので、先輩が自分を責めるという展開は意外だった。

それでも、一人が好きだったオレにとって、自分から歩み寄るなんていう手段は存在しなかった。何をしたらいい？ 何を目標にすればいい？ 一人の世界ならいつも簡単に決められるけど、誰かと居ると、途端に難しくなる。

「ただ、俺は……。みんなともつと仲良くなりたいただけなんだ。味方が居てくれるっていうのは、暖かくて、元気が沸いて、幸せになれる。それを、みんなで実感したかった。でも、まさか俺のせいでリザレが倒れるほど苦しんでるなんて、考えもしなかったんだ……」先輩がずっと自分自身のことを責めていた。本当に予想外だ。

じゃあ、オレは一体何を期待していたのだろう。あれだけ叫んだんだ。何の意図もなく叫ぶなんて考えにくい話である。発声練習じやあるまいし。

先輩に謝罪してもらうのは予想外だった。つまり、あれだけ先輩に非難往々にやつあたりしたのに、謝ってもらいたいわけではなかったらしい。

ということは、見捨てられたかった……？ いや、そんな馬鹿な話があるのだろうか。それこそ、ワガママの極みじゃないか。現に、オレは先輩が立ち去ろうとしたのを引き止めたんだから。

それじゃあ、一体、何……？

「リザレ？」

先輩がゆつくりとオレの名前を呼ぶ。そうだ、さっきからオレは黙ったままだ！ 何か言わないと、何とかして立ち直ってもらわないと……ん？

「先輩には、立ち直ってもらいたい」

とりあえず口に出して、今の考えを復唱した。立ち直ってほしい？ つまり、オレは先輩にヘコんでもらうつもりは無かったということになる。

改めて考えてみれば当たり前の話だ。オレはただ……。

「つらくなつたのを我慢できずに吐き出ただけで……」

そう、先輩なら受け止めてくれると期待して。落ち着いてしつかりと耳を傾けてくれると信じて。

「オレも、落ち着きたかったから……」

先輩にあれこれしてもらおうというわけじゃなくて。

「ただ、自分のために叫んでただけだから……」

先輩を巻き込むつもりは無かったんだ。

「それは、昔の俺と同じ心境だよな？」

自問自答を終えたオレに、先輩は穏やかに話しかけてくれた。キョトンとして、オレは先輩のほうを振り向く。

「過去の先輩と同じ気持ちですか？」

「そうだ。俺は中学のころ、苦しいあまりに暴れまわったし大食いもした。リザレは、苦しいあまりに独りになって、どこかに向かつて叫んでたんだな、きっと……」

そうなのかなあ。オレは首をひねって考えていた。全く違う行動をとっていた中で、共通する気持ちとは？

「分かるんですか？ オレが苦しんだってこと」

「さあ、俺とは違う環境だし、違う性格をしてる。だから、同じ苦しみとは言わない。けど、結局のところはお互いに苦しい状態に置かれていた。それは、間違いないなって思ってたさ」

「でも、先輩は誰もそばに居なかったから、ですよ？ オレは……、確かに誰かがいつもそばに居ましたよ？」

「俺だって、セバスはいつも居てくれたぞ？ 俺が勝手に見捨てられてると思ってただけだ」

「うーん……。オレは、そばに居てくれる相手はちゃんと認識してたんだけどな」

違いと言えば、先輩はセバス一人だけ。オレは大人や友達がいた。先輩は一人だと誤解していたけど、オレは一人ではないと認識してた。それでも、同じように苦しいという状態だというのだ。

「あつ、リザレ！ 元気になったか！？」

ガチャリと突然扉が開いて、そこから電気の明かりが差し込んできた。驚いて振り向いてみると、そこには飛竜の雄々しい姿があった。

「れ、レウト？ 声が大きいよ……」

「すまんすまん。心配で気になってさ。元気そうで良かったぜー」

「……」

レウトはオレに近づいてきて、大げさに翼を広げながら心配の度合いを表現していた。その素直な気持ちに、オレは自然と微笑んでしまう。

「レウト、本当なら部長の俺がみんなの就寝をチェックするはずだったのに、任せて悪かったな」

「なあに、俺だって副部長だからな！ ラッシュが忙しい時くらい、協力するぜ？」

レウトは、ラッシュ先輩がオレの看病に徹するために、役を引き受けてたんだ。だから、先輩はオレにつきっきりでいてくれたんだ、

オレはそう理解した。これは仲間の連携プレーだった。

突然のレウトのお見舞いに焦ってしまうが、先輩はというと、さつきよりも満面の笑顔で、レウトと拳を重ね合わせている。

そんな友情を確かめ合う二人に向かって、いつの間にかオレはこう言っていた。

「ありがとう……」

「何言ってるんだよ？ 俺たちは仲間だぞ」

「レウトからそんな真面目な言葉がでるとはな。でも、確かにその通りだ」

オレは恥ずかしくなって、軽く笑ってごまかした。彼らの豪快で力強い笑顔には遠く及ばないけれど、オレはオレなりに、みんなと付き合っていけばいい。彼らに通じる日も、そう遠くないだろうから。

「あ、レウト。ちょっといいかな？」

「ん、何だ？」

「レウトは先輩の昔の様子について何か知ってるみたいだけど、何て言っただの？」

「ああ、アレか？ ラッシュは昔、メタボ……」

ドゴッ！！

オレの目の前をリオレウスが一つ、三日月の弧を描くように綺麗に飛んでいった。

ポケハン学園バトル部の宿泊行事（後書き）

僕の作品で登場するキャラクター「リザレ」を長編で書いてくださったというフォック様の作品を、自キャラ視点で文学風にアレンジしてみました。

快く承諾をしてくださったフォック様に心からお礼を申し上げます。共に、投稿が遅くなりましたこと、ここから深くお詫び申し上げます。

まさか、ここまで遅くなるとは思わなかったんだよね（汗）

フォック様の作品は熱いバトルものが中心で、それを辿っていけば、自分にも勢いのあるものが書けるかも！ という簡単な動機があります。正直、リザレがどれだけ冷めた目で見ているか、暴露しただけのような気がしてなりません（笑）

ちなみに、空気読みについて途中でリザレが真面目に考察していますが、作者のでたらめです。信用しないでください（苦笑）

（2010/07/08）誤字脱字の修正、前書き・後書き追記

（2010/07/09）誤字脱字の修正

（2010/07/10）誤字脱字の修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8533j/>

雑記の綴り

2010年10月10日19時03分発行